様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２２１５

研究課題名（和文）インドにおける仏教の終焉の解明

研究課題名（英文）Research on the Final Phase of Buddhism in India

研究代表者
高島　淳（Takashima, Jun）

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：４０２０２１４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：インドにおける終焉期の仏教について、南インドのタミル・ナード州のカーヴェリ河デルタ地帯を中心とする地域において13世紀までは仏教の活動は十分に盛んであったこと、弱まりながらも最後は16世紀まで存続したことを明らかにした。さらに、その仏教の僧院としてのあり方は上座部と考えられる一方、在俗の信徒の信仰には大乗的な観音や弥勒の信仰が強かったが、密教の要素はそれほど見られないことが認められる。このような仏教のあり方から、在俗信徒のあり方を僧の規範と一致させることができなかったことにより、僧の再生産のシステムをうまく構築できず、僧院組織を維持できずに仏教の終焉に至ったものと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
仏教が、その発祥の国であるインドにおいて滅びてしまったことについて、その様相と原因は未解明な点に満ちている。通説としては、インドの仏教はムスリム勢力の北インド侵攻、特にヴィクラマシーラ僧院の破壊を決定的な契機として13世紀には実質的に滅びたとされている。これに対して南インドにおいて仏教が16世紀まで存続したことを明らかにし、しかもそのあり方の本質が上座部的であったことを示したことは、インドにおける仏教の終焉の理解に大きく貢献するものである。

研究成果の概要（英文）：By conducting field research on the remaining Buddhist statues in the Tamilnadu state of India, we have proved that Buddhism was active enough until the 13th century in the Kaveri delta region and survived well into the 16th century. Those statues of Buddha should have belonged to Theravada monasteries, while small bronze statues of Avalokiteshvara and Mayitreya found from Nagapattinam shows lay people's religious tendency towards Mahayana Buddhism. Also Vajrayana trend was not clear in South India. This dichotomy of Buddhism between Theravada monks and Mahayana lay people, resulting in incapability of reproducing monks, should be considered as the fundamental cause of the decline of Buddhism in India.

研究分野：宗教学

キーワード：仏教の終焉　南インド　上座部仏教　大乗仏教　密教　図像学　碑文　植民地期文献

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

仏教が、その発祥の国であるインドにおいて滅びてしまったことについて、その様相と原因は未解明な点に満ちている。通説としては、インドの仏教はムスリム勢力の北インド侵攻、特にヴィクラマシーラ僧院の破壊を決定的な契機として 13 世紀には実質的に滅びたとされている。

しかしその終焉のあり方について、その中核的組織である僧院については（1）ムスリム勢力による破壊が大きな要因か、（2）ヒンドゥー教の圧力によって王や商人ギルドなどからの庇護や後援などが消失したために存続できなくなったか、また信徒については、（3）すなおにヒンドゥー教の信徒となってヒンドゥー教に吸収されたか、（4）新たにイスラームの信仰を受け入れたものが多かったか、などさまざまな仮説が提唱されている。

ヒンドゥー教に同化して吸収されていったとする仮説について言えば、その前提として後期のインド仏教が完全に密教化して、その実質がヒンドゥー教とほとんど変わらないものになっていたという仮定が前提とされているが、当時の仏教の実際のあり方についての研究はほとんどなされていない。

後期インド仏教の実際のあり方がインドの各地方においてどのようなものであったかの検討なしにインド仏教の終焉の研究は不可能であるという視点からの研究は、多少は行なわれるようになったものの、仏教史の研究の中心は北インドに偏っており、南インドにおいて 16 世紀ころまで仏教が残存していたことは知られていても、その史料に着目して解明しようとする研究は実質的に存在しなかった。

南インドにおいて特に注目すべき地域と出土遺物として、タミル・ナード州のカーヴェリ河河口デルタ地帯、中でもナーガパッティナムから出土した 300 体以上のブロンズ仏があげられる。ナーガパッティナムに仏教僧院があったことは、チョーラ期の刻文やミャンマーの 15 世紀の碑文からも知られ、その一部であった塔の廃墟が 19 世紀まで存在していたことが、オランダの植民地期の文献などによって知られている。

これらブロンズ仏に加えて、近年において多数の石仏が野ざらしの様な状態でカーヴェリ河河口デルタ地帯において発見されており、従来から知られているカーンチプラムの石仏やクンバコーナムの碑文などと合わせて検討することで 11 世紀から 16 世紀までのこの地域における仏教のあり方が密教的なものとは言えないものとなっていたことを明らかにすることができると思われる。

２．研究の目的

本研究では、南インドの終焉期仏教の様相を、出土遺物、碑文、ヨーロッパ植民者等の文献、といった多方面の資料を総合的に用いることによって可能な限り明らかにすることによって、インドにおける仏教の終焉の様相と原因を解明することを目的とする。

３．研究の方法

本研究ではまず 2 種類の現地調査を行なう。一つは博物館等に所蔵されている仏像等の調査で、ナーガパッティナム出土の仏像等の内で、チェンナイ博物館以外のインド各地の博物館に分散されてしまったため充分に調査されていない仏像等の調査と撮影である。もう一つは、南インドのカーヴェリ河河口デルタ地帯などで野仏のように散在している石仏の調査である。

このような現地調査に加えて、碑文やヨーロッパ人の旅行記録など文書資料を新しい総合的視点から再検討することによって、南インドにおける終焉期のインド仏教の様相を新たな次元で解明する。

４．研究成果

本研究においては、主要な調査地域としてのタミル・ナードの他にスリランカ、ケーララ、マンガロール、ガヤー周辺における実地調査を行なった。タミル・ナードについては、カーンチプラム周辺、カーヴェリ河デルタ地帯、その他の地域の三つに区分できるが、カーヴェリ河デルタ地帯においては 20 カ所以上の地点において単独の仏座像を中心とする遺物が野ざらしに近い形で存在していることが確認できた。年代的には、11 世紀から 13 世紀を中心とするものと図像学的に推測できるものである。基本的に上座部のブッダ像であり、頭頂部の炎の表象は特徴的であるが、スリランカのものともある程度の類似を示している。際立っていることは、これらの仏像が寺院などとは無関係に発見されていることである。

現在祠堂に納められているものは当初は野ざらしで発見された後に近年になって祠堂を建てて納めたことが明確であることから、これらの仏像は仏塔の側面に安置されたものであった可能性が高い。このことはタミル古典文学『マニメーハライ』において仏像の記述がなく仏塔のみの信仰であったように思わせる様相を呈していたことについて、仏像は常に仏塔に付属していたことから特に述べられなかったという新たな解釈を提起させてくれる。インド的な心性から考えて、仏像は崇敬されるため何らかの形で保存されるが、仏塔は維持する僧院などの組織がなくなると、内部の土砂を囲っている石板やレンガを建材として持ち去ってしまうため容易に更地にされて消滅したと考えられる。

仏塔だけが存在したとは考えにくいので、農村部における仏像出土地については、木造建築の住居施設を伴った仏塔を中心とした小規模な僧院施設であったと推定することが、スリランカの遺跡の状況などとの比較から可能であると思われる。1733 年のオランダの絵画によるナーガパッティナムの僧院跡の描写で、小祠堂と露天の大きな石仏があったことが描かれているが、これも僧院跡で残るものが露天の石仏だけになる様子を示していると考えられる。

南インドにおける重要な調査としては、アラビア海に面する港市マンガロールのマンジュナータ寺院の 3 体のブロンズ仏像について行なった。現在 Vyāsa として祀られている仏座像、ヴィシュヌとして祀られている観音座像、シヴァとして祀られている文殊金剛座像が主堂の周囲にある。文殊金剛像の台座の碑文に 1068 年に仏教僧院に寄進したと刻まれている。このことから、現在のマンジュナータ寺院がかつては仏教僧院であって、おそらくは仏塔のあったところをシヴァのリンガを祀る寺院に立て直した、その周囲に、像をシヴァやヴィシュヌとして解釈しなおしながら、かつての仏教僧院の尊像を残したものと推測できるのである。この寺院が現在ナート派と密接なつながりを有していることから、上座部的、大乗的、密教的という三つの要素を保持していたことがその三つの仏像から推定できるかつての仏教僧院が、ナート派と密教とのつながりを契機としてシヴァ教寺院に吸収されていったという過程があったのではないかと推測される。

碑文と関連する調査として、カーヴェリ河デルタ地帯における重要な都市であるクンバコーナムのクンベーシュヴァラ寺院にある仏教寺院に言及する碑文とそこで言及されている仏教寺院の所在の探索に関する調査を行なった。1580 年と考えられるこの碑文は、仏教寺院の敷地を通る水路の補修に関して補償について言及している。その受領者の名前の意味するところは「不死のナーヤカ」であるが、ナーヤカは王などと同時にブッダにも用いられていることから、この仏教寺院の主尊の名前と理解して良いものと思われる。土地の贈与などの際に寺院の主尊が法人格として主体となることはインドでは一般的であるからである。さてこの寺院の存在した土地の名前と一致する寺院としてクンバコーナムからほど近くにあるティルヴァランジュリ寺院というシヴァ教寺院がある。そしてこの寺院からは現在チェンナイ博物館にある 2 m以上の大きな仏立像が発見されている。現在のティルヴァランジュリ寺院には仏教的遺物は残されていないが、広い構内を有するこの寺院の境内にかつては仏教寺院が存在していた可能性は十分にあると考えられる。

いま一つ重要なものとして北インドのクルキハール（Kurkihār）遺跡の調査がある。クルキハールはガヤーから東北東約 25 ㎞にある村である。小高い土塁があってそこにかつては仏塔があったと報告され、19 世紀後半に多数の石仏が発見された。さらに埋蔵されていたブロンズ仏等 150 体以上が 1930 年に発見され、パトナ博物館に納められた。インド考古局のカニンガムによって大迦葉が弥勒を待つ鶏足山と同定されたことでその後の論議を呼んだが、現在では鶏足山は別の地点とされている。玄奘には「戒賢対論の伽藍」というガヤーとの位置関係が対応する地点の記述があるので、今回調査でそれとの整合性を確認してみた。玄奘の「孤峰」という記述については、平原の中に高さ 10 m程度のマウンドがあるクルキハールの現状に相当な高さの仏塔が建っていたであろうことを考えると地形的特徴は一致するとして良いものと思われる。現状でも村内の女神の寺院前庭に数体の石仏が供養されており今後の発掘調査が待たれる。

戒賢と南インドの外道の論師との対論という玄奘の記述に加えて、クルキハール出土のブロンズ仏の 10 体以上から南インドのカーンチの僧による寄進の刻文があることから継続的な南インドとの関係が想定される。このような遠隔地との関係を説明できるであろう傍証としては、三つのブロンズ像

に Āpaṇaka Mahāvihāra という名称が寄進者の住所として記されていることから、僧院居住の在家信徒が僧院に寄進したものとして、この名前がクルキハールにあった僧院のものとして推定できることがある。Āpaṇaka とは「市場」「商人」を意味することから、この地にあった僧院が遠隔地交易と密接に関係していたことが推測できるのである。位置的にもオリッサ方面から王都パータリプトラに至る主要街道から分岐してガヤーやブッダガヤに至る道の途中にあたり、聖地巡礼の拠点であると同時に奉納品を制作してもらう工房の街でもあったのだろう。南インドからの寄進が合計 15 あり、すべてカーンチの僧（一人はケーララ出身）によるものと推定できる（僧と明記は 8 のみであるが残りの名前などが僧と類似した構成）。また、仏像のうちの二つに頭頂の炎という南インドに特徴的な造形が見られ、一つの寄進者がカーンチの僧であることから、様式を指定した造像が行なわれた可能性が高い。さらに、仏教僧院であるにもかかわらずバララーマ、ウマーマヘーシュヴァラなどのヒンドゥー教の神像が合計 8 体寄進されており、寄進者が僧院居住の在家信徒の妻などであることも注目に値する。これだけ大量のブロンズ像等を隠匿した理由としては 1197 年のムスリム勢力の侵攻の前に略奪を恐れたためと考えられるが、石仏を隠したりしていないので、宗教対立とかの意識が特にあったとは考えられない。また、このような形でのブロンズの埋蔵がナーガパッティナムにおいても見られていたことについては、ナーガパッティナムの場合 16 世紀初頭のポルトガル勢力の侵攻の前に行なわれたと見るのが自然である（出土地点は 16 世紀にポルトガル総督の庭園となった場所である）。

以上のような調査の結果を総合すると、南インドにおける終焉期の仏教のあり方については、以下のように言えよう。カーヴェリ河デルタ地帯においては 13 世紀までは石仏の製作も行なわれていたことからもわかるように、それなりに活発な状態が維持され、個人の信者のものであるブロンズ像については 15 世紀まで引き続いて製作されていたことがわかるが、おそらくは 16 世紀始めのポルトガル勢力のナーガパッティナム支配の後に埋蔵したブロンズ仏を掘り出せないほど弱体化していたのであろう。1580 年のクンバコーナムの碑文の寺がティルバランジュリにあったとすれば、その後それほど経たない内にシヴァ教寺院に吸収されてしまったと想定される。カーンチプラムでは 16 世紀まで仏像製作も続いていた可能性が高いが、17 世紀にはおそらく終わり、ナーヤカ期における活発なヒンドゥー教寺院の建築などの際に、残っていた仏教僧院的なものはヒンドゥー教寺院などに転用されたものと考えられる。

その仏教の姿については次のように考えられる。僧院の主像などであったと思われる石仏の大部分がブッダであり、観音像などはブロンズでしか発見されないことは、この仏教の基盤をなす僧院は上座部の信仰を中心としていた。一方、女性を含む信徒による小型のブロンズ仏には観音や弥勒が見られることから、在俗の信徒については観音信仰を中心とする大乗的な仏教も広まっていたと言える。いくつかのブロンズ仏の碑文からも推定できるように、おそらくは海上や陸上の遠隔地交易商人にとっては、観音は危険な旅路の守護者として篤く信仰を集めていたものと推測される。密教的な姿としてはマンガロールのマンジュナータ寺院の文殊金剛以外にあまり見いだせないが、この寺は港を見下ろす高台に位置していて、ここでも海上交易商人との関係を推測させる。

つまり、僧院においては出家僧が上座部的信仰を保ちながら、一般信徒に対しては観音などの信仰によって世俗的な救済をもアピールしようとする二重構造的な姿があった可能性が高い。このような状態と推定して仏教の終焉について仮説を立ててみると、ティルバランジュリの例などから、一般の信徒については観音信仰がシヴァ信仰に（あるいはターラー信仰が女神信仰に）という形で、多くの場合シヴァ教に吸収された可能性が高い。一方、僧院における僧たちの上座部的信仰はヒンドゥー教に吸収されることはなかったであろう。しかしながら妻帯しない僧たちからそのままで次世代の僧が育つことはないので、在俗の信徒に上座部の僧として出家しようと思わせるだけの方向づけを与えなければならないのであるが、そうした基盤となる在俗の信徒にヒンドゥー教との習合的信仰を許容してしまうと僧の再生産は不可能となる。ジャイナ教が在俗の信徒の中でのヒンドゥー教との差異化を強調することによって存続したことと、この点において相違したものと考えられる。

また、仏教僧団の存続のための受戒の儀式に最低 5 人の僧が必要であることも、存続の条件を厳しいものとするが、南インドの場合、受戒のみをスリランカにおいて行なうことによって、最終的な局

面において細々と継続が可能となったというようなことがあった可能性もある。マガダから高麗と元に渡って、1363 年に亡くなった指空がスリランカで受戒したことは北インドからわざわざスリランカに受戒に赴いた一例であるかもしれない。南インドでもカーンチプラムなどに 16 世紀まで残存していた局面では同様のことが行なわれていた可能性も考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 高島淳	４．巻 93
２．論文標題 インドにおける終焉期の仏教をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 320-321
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Yuko FUKUROI	４．巻 38
２．論文標題 The Buddhist Art in the Southernmost Part of India: on the Buddha Images in Vijayanagar Style	５．発行年 2019年
３．雑誌名 密教図像	６．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高島淳	４．巻 92
２．論文標題 南インドにおける終焉期の仏教－野外石仏調査報告を中心に	５．発行年 2019年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 219-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 袋井由布子	４．巻 34
２．論文標題 拝まれるブッダル：タミル・ナードゥ州における仏像現存例の現地調査報告	５．発行年 2019年
３．雑誌名 東方	６．最初と最後の頁 139-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高島淳	４．巻 91
２．論文標題 インドにおける終焉期の仏教---南インドを中心に---	５．発行年 2018年
３．雑誌名 宗教研究	６．最初と最後の頁 307-308
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　3件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 高島淳
２．発表標題 絶対者とヒンドゥー教
３．学会等名 2019年度第1回RINDASセミナー「中世ヒンドゥー教とはなにか」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 高島淳
２．発表標題 インドにおける終焉期の仏教をめぐって
３．学会等名 日本宗教学会第 78 回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 袋井由布子
２．発表標題 インド深南部の仏教美術
３．学会等名 多元的古代研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 高島淳
２．発表標題 ヒンドゥー教とは?
３．学会等名 日本南アジア学会30周年記念連続シンポジウム第6回（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高島淳
２．発表標題 南インドにおける終焉期の仏教－野外石仏調査報告を中心に－
３．学会等名 日本宗教学会第 77 回学術大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mori Masahide
２．発表標題 Indian Abhiseka
３．学会等名 The World of Abhiseka: Consecration Rituals in the Buddhist Cultural Sphere（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mori Masahide
２．発表標題 Eight Life Scenes of Sakyamuni Buddha in Pala Sculptures
３．学会等名 The Silk Road and the Art of the Tibetan Plateau Forum: Pala Art its Influence in China（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 高島淳
２．発表標題 インドにおける終焉期の仏教---南インドを中心に---
３．学会等名 日本宗教学会第 76 回学術大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 森雅秀
２．発表標題 「女性の姿をした仏たち：その信仰と美術」
３．学会等名 平成29年度 西田幾多郎哲学講座（西田幾多郎記念哲学館）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計5件

１．著者名 Motoi Ono, Jun Takashima & Jun'ichi Oda	４．発行年 2020年
２．出版社 ILCAA	５．総ページ数 1586
３．書名 Keyword In Context Index to Dharmakirti’s Sanskrit Texts	

１．著者名 高島淳・手嶋英貴	４．発行年 2020年
２．出版社 龍谷大学南アジア研究センター	５．総ページ数 36
３．書名 『ヒンドゥー教とはなにか』	

1．著者名 森 雅秀(著/文)宮坂 宥明(イラスト)	4．発行年 2019年
2．出版社 春秋社	5．総ページ数 344
3．書名 チベット密教仏図典	

1．著者名 長野 泰彦 （編）,森 雅秀 （編）	4．発行年 2019年
2．出版社 風響社	5．総ページ数 398
3．書名 チベットの宗教図像と信仰の世界	

1．著者名 森雅秀	4．発行年 2018年
2．出版社 アジア図像集成研究会(Asian Iconographic Resources Monograph Series, vol.20)	5．総ページ数 90
3．書名 『チャトラパティ・シヴァジ博物館のヒマラヤ美術』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	袋井　由布子 (Fukuroi Yuko)	中村元東方文化研究所・研究員	
連携研究者	森　雅秀 (Mori Masahide) (90230078)	金沢大学・人間科学系・教授 (13301)	